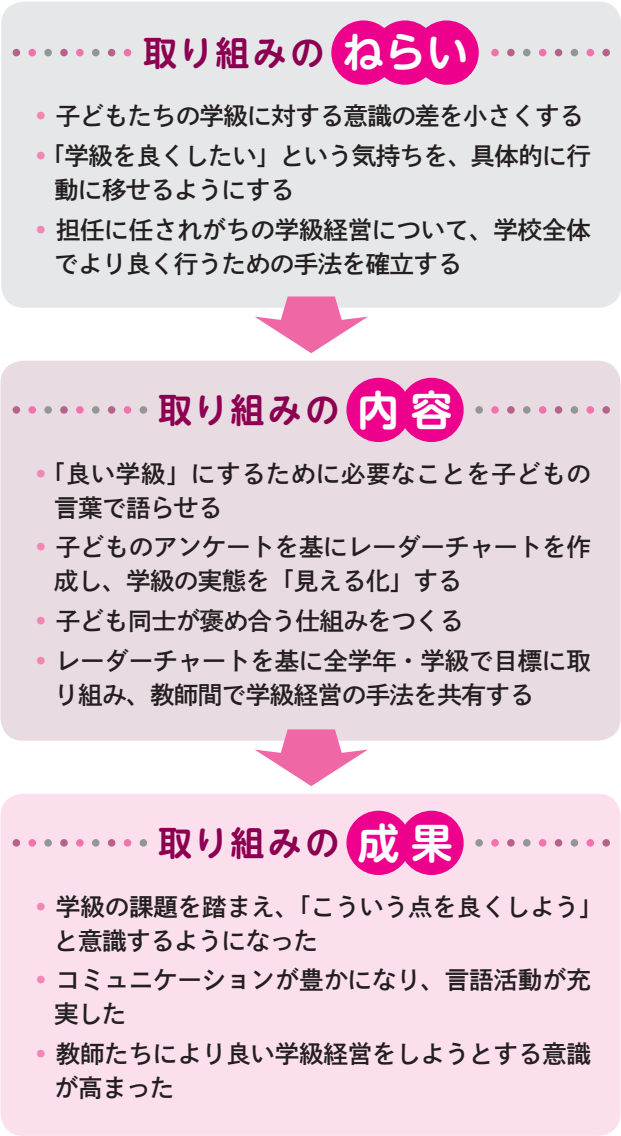


プロジェクト活動の積み重ねで 子どもと共に学級をつくる

山梨県 山梨市立日川小学校

山梨市立日川小学校は、2011年度、学級全員で学級づくりを進める「学級力向上プロジェクト」を始めた。学級の実態を子どもが分かるように「見える化」して、自ら課題や目標を明確にすることによって、学級づくりに主体的に参画する意識を生み出している。



取り組みのねらい
誰でも実践できる学級づくりの
手法の確立をめざす

山梨市立日川小学校が「学級力向上プロジェクト」に取り組み始めたのは、2011年度に山梨県から「学力向上パイロットスクール」の指定を受けたことがきっかけだった。原喜雄校長は次のように話す。

「学力向上のためには、子どもが安心して学習できる環境を整えること、つまり学級づくりが先決であるという考えの下、学級力向上を図る取り組みを始めました」

家庭や地域の協力もあり、子どもには生活

S c h o o l D a t a

◎1874(明治7)年開校。甲府盆地の東部に位置し、周囲にはぶどう畑が広がる。地域の伝統行事に積極的に参加するなど、地域社会に根ざした学校づくりに力を入れる。



校長 原喜雄先生

児童数 209人 学級数 9学級(うち特別支援学級2)

所在地 〒405-0024 山梨県山梨市歌田140-1

TEL 0553-22-0742

URL <http://www.city.yamanashi.yamanashi.jp/gover/public/school/hikawa.html>

公開研究会 未定

*プロフィールは2014年3月時点のものです

学びに向かう土台を築く学級づくり

態度や学習姿勢の面では大きな課題は見られなかった。しかし、友だちとのかわりという面で見ると、子どもたちに意識の差があり、率先して頑張る子どもと受け身の子どもに分かれていた。また、子どもが「学級を良くしたい」という気持ちを抱いても、なかなか行動に移しにくいという課題もあった。

校内研究では、担任個々の努力に任せることが多かった学級経営のあり方を見直し、学校全体で共通理解を図りながら、誰でも実践できる手法の確立を目指した。また、学級経営の重要性には賛同しても、それまでの校内研究のテーマは教科学習が中心だったこともあり、「学級力」を高める手法の研究に戸惑う教師もいた。そこで、早稲田大の田中博之教授から助言を受けながら研究を進めた。

取り組みの内容

教師主導のあり方を見直し 子どもと一緒に学級をつくる

11年度の試行期間を経て、12年度に中学年以上で本格的な実践が始まった。最も重視したことは、教師主導の「プログラム型」から、子どもと共に学級をつくる「プロジェクト型」への移行だ。3年生での実践を通して、子どもが参画する学級づくりの進め方を見ていく。まず年度の最初に実施するのが、「ビッグカルタ」だ（写真1）。教師が子どもたちに

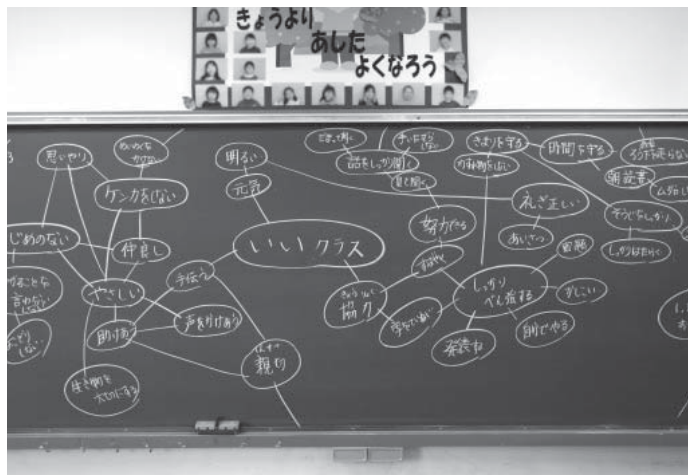


写真1 子どもから出たさまざまな意見を教師が整理したビッグカルタ。写真に撮って教室に掲示し、「いいクラス」のイメージを忘れないようにした

に「今のクラスは良いクラスだろうか」「良いクラスとは、どのようなクラスだろうか」などと問い掛け、子どもたちから各自が考える良い学級のイメージを引き出していく。

12年度、日野原和貴先生が受け持った3年生の学級では、良いクラスの条件として、初めは「しっかりと勉強する」「やさしい」という意見が挙がった。そうした抽象的な意見に対して、日野原先生が「勉強するとは、どういうこと？」と何度も問い掛ける。すると、子どもたちから「きちんと宿題をする」「自分でやる」「字を丁寧に書く」といった具体的な意見が出てきた。日野原先生は、これら



山梨市立日川小学校校長
原喜雄 はら・よしお
「子どもや教職員から自然な笑顔が湧き出る『たのしい学校、たのしい授業、たのしい職場』をつくる」

山梨市立日川小学校
高野栄子 たかの・えいこ
研究主任。2学年担任。「子どもの話に耳を傾け、安心して過ごせる学級をつくる」

山梨市立日川小学校
日野原和貴 ひのはら・かずき
4学年担任。「子どもを1人の人間として尊重し、つながりを大切に深い信頼関係を築く」

を整理しながら黒板に書き込み、ビッグカルタを完成させた。

そのように、理想とする学級の状態を認識させた後、5月に学級での学習や生活、人間関係などの状態を、子どもが個々に評価する「学級力アンケート」(*)を行う。集計結果はリーダーチャート(P.20写真2)で表し、これを基に「スマイルタイム」で学級の課題は何か、どう改善すればよいかを話し合う。

日野原先生の学級では、学級力アンケートの結果、「聞く姿勢」「学習」が低いことが分かった。それらを改善するための方法を学級全員で話し合い、「聞く姿勢」については「人の目を見て聞く」「最後まで聞く」「うなずきながら聞く」など具体的な目標を出した。

*「学級力アンケート」はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトからダウンロードできます。
<http://berd.benesse.jp> → HOME > 教育情報 (小学校向け)

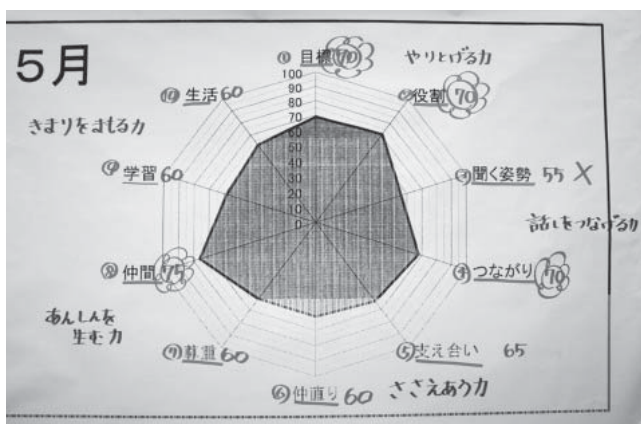


写真2 学級力アンケートの結果を集計したレーダーチャート。日野原先生の学級の話し合いでは、数値が低かった「聞く姿勢」「学習」を重点的に改善する流れになった。教師はレーダーチャートをあらかじめ分析しているが、あくまでも子どもの言葉で語らせることを大切にしている

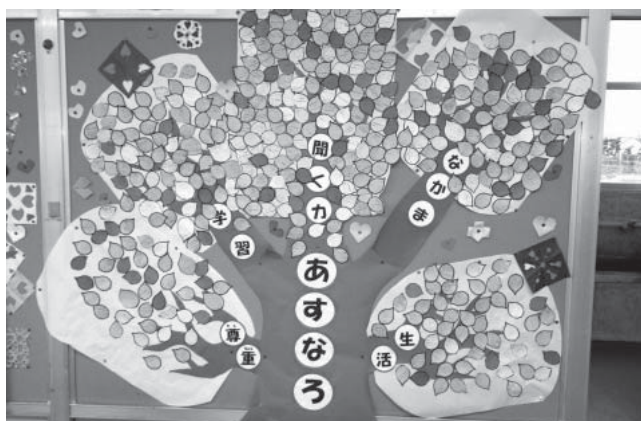


写真3 日野原先生の学級では目標を「あすなるの木」にし、良かった友だちの姿を葉のカードに書いて貼った。特定の子どもにカードが偏らないよう、隣同士やグループ内で書く場面も設ける。最初は「聞く力」「学習」だった枝は、「学級力アンケート」の結果を受けて「なまか」「尊重」「生活」が増えた

これらの目標を学級全員で達成するために「あすなる大作戦」を行った。あすなるの木に見立てた掲示物に、友だちの良かった姿を記入した「ほめほめカード」を貼っていく。日野原先生は、この一連の学級づくりにおいて気を付けている点をこう話す。

「課題や目標を教師が一方的に伝えるのではなく、ビッグカルタや学級力アンケート結果の分析などによって、子ども自身が考え、『自分たちのこと』という主体的な姿勢が生まれます。更に、友だちを褒め合う場面を加えることで、子どもも教師もめあてに向けて意識的になり、良い行動が広がっていきます」

学級力アンケートは、10月と1月にも実施し、努力の成果を「見える化」して目標への意識を保持すると共に、新たな課題の発見に努めた。集計結果が出たら、スマイルタイムで分析し、課題が浮かんできたら解決方法を話し合う。日野原先生の学級では、新たに課題に対する目標として、あすなるの木に「枝」を追加した。最初は2本だった枝が、最終的には5本になったという(写真3)。

また、日野原先生は、学級力アンケートの結果を自身の指導に生かしていると話す。

「レーダーチャートはあくまでも子どもが学級について考えるきっかけであり、他学級と比べた数値の高低は重視していません。ま

た、次第に子どもの学級に対する意識が高まると、評価が厳しくなることもあります。今は、教師自身が指導を振り返るきっかけにもなっています」

例えば、1月のレーダーチャートでは「つながり」の項目に低い結果が出て、日野原先生はつながりを意識した指導にあまり力を入れていなかったことに気付いた。そこで、授業中の発問を工夫すると、徐々につながりのある発言が生まれていったという。

1年間の取り組みを通して、学級づくりに対する意識の高まりを感じた日野原先生は、持ち上がりとなった13年度の4年生の学級では、より効果的に目標を達成するために、学級目標を踏まえた個人目標を設定し、短冊に書いて机に貼る取り組みを始めた。個人目標を達成する姿が見られた時は、友だちが短冊にシールを貼るといった方法で励ましている。

年3回の「スマイルミーティング」で教師が互いの実践を認め合う

年度初めのビッグカルタと年3回の学級力アンケートは学校共通の取り組みとして行い、スマイルタイムや目標達成に向けた取り組みは、それぞれの担任が工夫している。研究主任の高野栄子先生はこのように語る。

「学校全体としての方向性の下、取り組みの具体策は決めきらず、学級の実態と先生の個性を生かして取り組みを工夫しています」

学びに向かう土台を築く学級づくり



写真4 スマイルミーティングでは、各学級の報告に対し、良かった点を中心に意見を出し合う。手法の共有と共に、学級経営に対する意欲を維持・向上させることもねらいだ

ビッグカルタと学級力アンケートは3年生以上での実践だったが、1・2年生の担任からも実践したいという強い声があり、13年度は1月に試験的に1・2年生でも学級力アンケートを行った。

担任個々の工夫を共有する場としては、年3回「スマイルミーティング」を開いている。2つのグループに分かれ、各学級の報告について良いと感じた点などを付せんに記入して整理し、全体で共有する（写真4）。

例えば、ある学年で、学級力アンケートでリーダーチャートが大幅に小さくなったことがあった。そのため、道徳の時間などに友だちの良いところを探したり、「いい言葉」「いやな言葉」を出し合ったりする活動をしたと

ころ、リーダーチャートが元のように大きくなったという指導事例が共有された。

試行段階である低学年の担任も報告し、学校全体で有効な指導を検討している。2年生の学級では、目標を意識して活動するのがまだ難しいため、「トゲトゲ言葉撲滅運動」と称して言葉遣いを見直すなど、感覚に訴える活動を中心に据え、一定の成果が見られたことなどが報告された。

取り組みの成果

学級力の向上が 言語活動などの深まりをもたらす

学級力向上プロジェクトを通し、子どもの姿はどう変容しているのか。

「子どもたちが漠然と感じていた学級の課題が数値として目に見える状態になり、『こういう点を良くしよう』と意識するようになりました。学級としての目標が明確になったため、子どもによる意識の差も小さくなったと感じています」（高野先生）

子どもへの学習に対する姿勢も明らかに意欲的になっていくと話す。

「以前より、落ち着いた態度で授業に集中するようになりました。少しざわついた時でも、『聞く姿勢はどう？』という一言で、すぐに集中力を取り戻します」（日野原先生）
子ども同士の関係が良くなり、学習を深め

やすくなったことも大きな成果と感じている。特に、言語活動を充実させやすくなったのが大きいと、原校長は話す。

「豊かなコミュニケーションが成立する学級が基盤になれば、意見交換やグループ学習は深まりせん。学級づくりと教科指導はセットであると、改めて感じています」

学級経営に対する教師の考え方にも変化が見られた。学級経営について共通理解を図り、実践事例を共有する中で、互いが刺激し合い、より良い学級をつくらうという気持ちが強まっている。同校には40、50代の教師が多いが、経験則に基づいた指導になりがちなベテラン教師も、学級経営を見直す大きなきっかけとなった。

学級経営の手法が共通化されて各学級の実態が見えやすくなったため、課題が大きくなる前に管理職が把握し、早めに対応できるようになったことも大きな利点に挙げる。

「少子化などの影響で人間関係が築きにくくなる中、集団内で生きる力を育成する場として、学級の役割はますます大きくなっていくでしょう。研究を続けていると、実行すること自体が目的化してしまいがちです。それを避けるためにも、教師と子ども、また子ども同士の応答が成立しているか、自分たちで考えて問題を乗り越える力が育っているかなど、常に子どもの成長を見つめて取り組みを深めていきたいと思えます」（原校長）